

巻頭言

日本惑星科学会が設立された1992年は、ちょうどバブル崩壊の頃であった。大学では大学院重点化が始まり、インターネットを使ったメールのやり取りが日常化した頃である。いま思えば、古き良き昭和時代が名実ともに過去のものとなり、世の中が大きな音を立てて転換し始めた時期だった。

この間、太陽系外惑星の発見やアストロバイオロジーの新興があり、21世紀に推進すべき惑星科学の最重要課題へと発展した。またわが国においては、自前の惑星探査の成功が学会設立時の状況を根本的に変え、学会やコミュニティの在り方にも大きな変革を迫っている。

そもそも惑星科学とは、究極的には「地球の科学」をも包含する、きわめて普遍的かつ総合的な研究領域のはずである。地球科学者を巻き込んでさらに多様な研究や探査計画がなされるようになることが望ましい。その意味において、いまの惑星科学会は、狭義の惑星科学に埋没しているきらいがないか。やや逆説的ではあるが、研究者数の増加と研究の多様化の陰で、研究者の意識は学会設立時より逆に狭くなっていないか危惧される。

一方で、同時期に地球惑星科学関連学会合同大会から発展した日本地球惑星科学連合大会の右肩上がり成長は、6日間18会場パラレル開催(2012年大会)という状況をもたらした。その結果、直接関係するごく一部のセッションしか出席しない、という研究者の行動が顕著になった。秋も一番関係の深い学会しか参加しなくなったため、結果的にいまだこの学会でもセッションの多様性が失われているという。このことは、大学院重点化や講座制解体がもたらした教育の縮小再生産とも密接に絡み合っているように感じられる。常々批判されている学問の縦割り・細分化は、ますます進行していることが明らかである。広い視野と俯瞰的なものの見方を養うことは、大学においても学会においてもより困難な状況に陥っている。

日本惑星科学会の秋季講演会は(無論小規模だからではあるが、たぶん意識的に)1会場で行われてきた。太陽系形成論における理論と物質科学の意思の疎通が、20年以上前とは雲泥の差があるほど深まったことは、学会活動の大きな成果といえるだろう。ただ、このやり方は発表数の増加によってそろそろ限界に近づいている。学会の今後の在り方を考える上で、とても悩ましい問題である。

それでも、私たちは、私たちが住んでいるこの世界を理解するために、できる限り広い視野と好奇心を持ち続けたいものである。惑星科学は、本来それが可能なはずの特権的な学問分野なのだから。

田近 英一(東京大学)